

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

1

2026
No.723



特集

自分たちのことは 自分たちで決めたい

幸せになるために 西郷孝彦
よりよい「きまり」を自らの手でつくろう

濱畠芳和

- 1 人として 大下利栄子
- 2 教員のはじめの一歩 桜井佳子
- 4 心に種をまく 安田菜津紀
- 5 あなたに届けたいこの一冊 菊地澄子
- 6 この子と歩む 宮澤幸江
- 9 進め！ 推し活道 佐野初音
- 10 息子と歩く 千葉桜 洋

みんなの ねがい

2026年1月号

No.723

特集 自分たちのことは自分たちで決めたい

- 12 【座談会】幸せになるために—西郷孝彦さんを囲んで
 - 16 なんでも「集団生活だから仕方がない」で終わらせないで 奥田智江
 - 18 文化部がつくりたい！ 50年ぶりの
生徒会規約改正に挑んだ盲学校の高校生たち 深津冬惟
 - 20 みんなのねがいを自治体に届けよう！ 脇田美樹
 - 22 よりよい「きまり」を自らの手でつくろう 濱畑芳和
 - 24 私ときょうだい 由良拓也
 - 26 子どものミカタ 檜上貴史
 - 28 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
 - 32 シリーズ 18歳 辻 正
 - 34 暮らしの場は今 鶴見俊雄
 - 36 実践にいかす障害と医療 全 有耳
 - 38 ニュースナビ 川口市「きじばと」廃止問題 久遠貞志
 - 40 実践の魅力 井上三奈
 - 43 全障研の支部ニュース、紹介します 澤田淳太郎
 - 44 みんなのひろば
 - 46 BOOK／編集後記
- 裏表紙 おいしいひととき 大高美和



デザイン・イラスト
うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙のことば

夕暮れ時、地方の海沿いの町を歩いていると、河口近くの小さな川のほとりに保育園があった。お迎えの時間が近いのか、子供達は帰るのが惜しそうにめいっぱい園庭を走り回っている。夕陽に照らされ楽しそうに遊ぶ姿に見入っていると、園児たちが駆け寄ってきた。こんなにちは～と元気よく僕の前ではしゃぐ。写真を撮る様子を向こうで見ながら先生も笑って会釈した。まるで映画のワンシーンのような時間だった。

今年も素敵な瞬間に出会うため旅に出よう。僕の写真を通して、人と人との繋がりを少しでも感じてもらえたたらと思います。そして、この清らかな子供たちが悲しい涙を流さずに過ごせる日々でありますように。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。



第10回 やってみよう 性教育



全障研東京支部

桜井佳子

さくらい よしこ／公立小学校教員。1989年より肢体不自由特別支援学級で11年間、その後26年間知的障害特別支援学級を担任

しかし、バギナ・ペニスという性器の正しい呼び方を伝え、「バギナは赤ちゃんの通り道。みんなもお母さんのバギナを通って生まれてきた。とても大切な場所」と語りかけると、子どもたちの表情

に？ おとこのこつて なあに？」は、性差を外見や嗜好ではなく性器のちがいから考えられる絵本です。裸の女性・男性の写真を見て、子どもたちは大騒ぎ。あきくんも恥ずかしそうにそっぽを向きました。

「みんなバカばっかり。死ね！」家庭の事情で母親と離れて暮らすことになった3年生のあきくんは、毎日暴れ続けました。機嫌がいい時は「あの女、おっぱいデカイな」など性を感じさせる発言をし、頻繁に私の胸や股間を触ります。お母さんの愛情とスキンシップを求めていにプライベートゾーンの授業をしました。

大事な場所 プライベートゾーン

困難を抱えながら、今を生きる子どもたち。彼らに「きみが生まれてよかつたよ」と伝えたくて、私は性と生の授業を続けてきました。

イラスト 勝倉大和

自分たちのことは

みなさんの学校には校則がありますか。保育園や作業所、グループホームなどでは、どんなきまりやルールがあるのでしょうか。

その校則やきまり、ルールは、誰が、なんのために、どうやって決めたのか知っていますか。もしかしたら、「なんのためのきまりやルールなのか」を脇に置いて、教員や周りの大人が、一方的に決めてしまったものかも…。

「守らなければ」「守らせなければ」ときゅうくつな思いをしているなら、そのきまりやルールが、なぜあるのか、どうやって決めたのか、立ち止まって考えるいい機会なのかもしれません。

特集を通して、どうすれば「自分たちのことは自分たちで決めたい」という当たり前のねがいを実現できるのか、一緒に考えていきましょう。



自分たちで決めたい

文化部がつくりたい！ 50年ぶりの生徒会規約改正に 挑んだ盲学校の高校生たち

埼玉 盲学校教員 深津冬惟

先生は生徒のやりたいことを
やらせてくれない？

「もう先生たちは信頼できません」

玲那が学年主任と生徒会担当の教員に食つてかかったのは、彼女が高校1年生の秋だった。新しく放送部をつくりたかった玲那は、創部したいと身近な教員何名かにかけ合った。しかし、「いいよ」と言う教員もいれば、「だめだ」と言う教員もいて、話が全然進まなかつた。

玲那が2年生になつた6月、生徒総会の議題の一つに「文化部をつくりたい」という提案が出された。その数カ月前、玲那は生徒会役員選挙に立候補し、会計に当選していた。生徒たちの文化部創部に向けた大きな挑戦が始まつていく。

/// 愚痴も文句も「要求」に変える

本校の生徒総会では、学校生活に関する要求を提案議題として生徒たちが出し、話し合う。話し合いを経て可決された要求は、要求書にして教員へと提出される。この年は、十八の要求が提案され、「文化部をつくりたい」という提案はその中の一つだつた。提案者は、玲那の同級生の周平だつた。玲那のこれまで

の悔しい思い、部活動をつくりたいといふ思いに複数の友だちが共感しており、そのなかで、楽天的で思いやりのある周平のことだから、「しようがねえな」と提案者になつたのかもしれない（彼自身は運動部に入つていても関わらず）。提案は、玲那たちみんなの思いが要求となり、賛成多数で可決された。周平もまた、後に生徒会の書記として当選し、規約改正のとりくみの中心メンバーになつていく。

総会後につくられた要求書の文面は次の通り。

文化部をつくりたい。

（理由）本校には、スポーツ関係の部活動しかありません。スポーツだけでなく、芸術的なことや文化的なことに力を入れたい生徒のためにも、文化部をつくりたいです。

この要求に対しても教員からは、顧問をつけることや活動内容を明確にすることなどいくつかの条件を提示しつつ、「創部の手順を生徒会で具体的に検討・整理し、教員へ再度提案してください」との回答が返ってきた。

よりよい「きまり」を 自らの手でつくろう

立正大学 濱畠芳和



「きまり」は何のため、 誰のためにあるのか

「なんでそんなきまりがあるの?」

「どうしてきまりは守らなくちゃいけないの?」

——このように問われると困ってしまうこの問い合わせ、ここで一緒に考えてみたいと思います。

子どもに「きまりは守りましょう」と言うときの「きまり」は、ルールや法などとも呼ばれます。私たちの生活の中にはとても多くのルールがあり、私たちはこれらのルールを守つて生活しています。たとえば交差点を往来する人や車は、赤信号は止まれ、青信号は進めなどと、その灯火の示す指示に従わなくてはなりません。

ではなぜ信号は守らなくてはならないのか。信号は、私たちが安全に通行できるように交通整理をする役割を果たしています。交差点を横断しようとすると車が信号を守らないと、往来する人や車が安全に走行できませんし、交通事故の原因となり危険です。信号を守つてこそ、交差点を安全に通行できるわけです。

民法学者の末川博教授は『法学入門』

(有斐閣双書)の中で、法には三つの部類があると述べています。第一の部類として、「人の物を盗んではならない、借りた物は返せ、人を殺傷したら罰せられる」といったルールを「人間の共同生活では当然だと考えられている法規範」と分類しました。また「社会あるところに法あり」という法格言もあります。多くの人々が同じ空間の中で共存できるよう、お互いに安全に気持ち良く生活できるためのルールが必要不可欠ですし、これを守る必要があるわけです。

「きまり」は誰が決めたのかが重要

末川教授は、法規範の第二の部類として「上からの支配ないし統制の手段としてつくり出されている法」があり、この法は「上から下への抑圧の力でつくられる」と述べています。君主に対する不敬を罰したり、言論や集会・結社を抑圧したりするなど、時の権力者がその支配の道具としてルールを自由に定め、これらを人々に押しつけるものです。そして、これらのルールは民主主義社会になじまないものです。

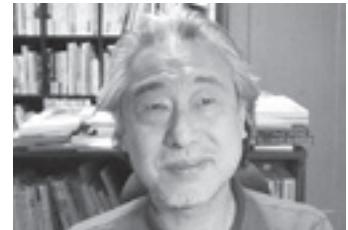
これとは反対に、第三の部類として「抑えつけられた被支配階級が下から強

ソーシャルワークってなんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

第10回 「共感的理解」と ソーシャルワーク実践



日本福祉大学
木全和巳

木全和巳／日本福祉大学社会福祉学部、児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『(しようがい)』と『セクシユアリティ』の相談と支援』(クリエイツかもがわ)など

本人になつて綴つてみよう

「(前略) 家でもときどき、思い通りにならなかつたりすると心が激しく爆発して、泣いたり、顔が真っ赤になつて大きな声を出したりして、お父さんやお母さんに大きな声で怒られて、また泣いたりしてしまいます。そんな時は、心が落ち着くお薬を飲むようにお母さんから言われているので、飲んでいます。きょうだいの中ではぼくだけです。何も考えずに行動してしまつたり、忘れものが多かつたりすると、お姉ちゃんにも怒られます。とつてもこわいです。時々、病院の先生のところに行くこともあるけど、遊んでつて言われ、少しお話するくらいで、そんなに嫌じゃありません。ADHDつていうしようがいらしいです。(後略)」。

学童保育で働く支援員の広瀬さん(仮名)が小学校2年生のたけし君(仮名)に代わつて、本人になつて綴つてみた本人紹介の一部です。本人になつての「自己紹介」づくりの取り組みです。その後、本人とも一緒に読みながら、自分でも納得できるところ、他の友だちに伝えたいこと、家族にも伝えてよい自分のおもいやねがいを確認していきます。そして、わかつてほしい自分のことをみんなに伝え、本人中心にみんなが「わかりあう」ことにつなげていきます。

もう一つ、児童福祉施設での実践です。知的に中度の遅れがあるひろし君(仮名)は、父親が暴力的な方でした。母へのDVで母親が失踪。父が兄弟3人を育てていましたが、幼児期から本人への体罰など暴力が出ます。小学校1年生の時

に施設入所をします。入所当初から一人で過ごすことが苦手で、職員の後ろをずっと追っかけます。職員が他の利用者と遊んでいると「かまつてほしい。自分の方をみてほしい」という思いが強く、大きな声を出したり、泣きまねをしたりして職員にアピールします。本人ができると思い込んでいることが実際にできることが多く、それを指摘すると受けとめることができず、癪癩を起こすことも。高等部になってもこうした傾向は続いていました。G Hへの移行が近づいている不安感もあり、行動がエスカレートしていきます。

職員さんたちとも相談して、「自己紹介カード」づくりにとりくみました。職員がひろし君になりかわって「ぼくは」と始まる自己紹介を記入し、本人と一緒に職員が記入した自己紹介のお気に入りを選んでいきます。この時に、ひろし君の中には「かまつてちゃん」と名づけた対象の研究もしました。どんな時に「かまつてちゃん」が発動するのか、その時に職員にどう対応してほしいのかも、いっしょに研究していきます。そして、「～～をして過ごすことが好き（得意）です」「○○は苦手なので、この時間は□□を手伝ってもらいたい」「○○の評価（表）があれば、○○の活動も頑張ります」「□□は期待していますが、■■は不安に感じています」等の内容も自己紹介カードに書き足しながら、移行先の交換日記などで使えるよう、どんどんノートに貼っていました。

一年後、職員さんが書いた実践報告には、次のような記述がありました。「作成している本人の様子として、各職員が

作った本人の自己紹介カードを読むと『泣けてくる』『嬉しいです。ありがとう』と笑顔で職員が書いた内容を聞いています。自己紹介カードの中には本人にとつての困り感が書かれている内容もあり、本人から『その内容書いて』と不得意なことを受け止めようします。なんとかしたいと思つてている様子や、G Hへの移行が近づいている不安感もありましたが、この取り組みを通じて前向きな発言が聞かれるようになります。職員みんなで考えてくれたのが嬉しいようで、『自己紹介カードは困った時のお守りとして使用していく』と言われており、移行する不安感の軽減に繋がったと思います」と。

「同情」と「共感」と「共感的理解」

演出家の平田オリザさんは、「いつもの自分と異なるコンテクストの中で自分の内面を探ること」を「同情（シンパシー）から共感（エンパシー）へ」と呼んでいます。この事象のもつともわかりやすい例として、「いじめのロールプレイ」をあげていました。そして、「同情する」とは自分から完全に離れて相手と自己を完全に同一化しようと試みること、「共感する」とはまったく同じ経験ではないかもしれないけれど、「もしかしたらこうかもしれない」と、自分のコンテクストの外側に身を置きながら、自分の内側のコンテクストと結びつけてゆくことと書いています。そして、異なるコンテクストが重なり合う場所、共通する意味を探つていくことの重要性を指摘しています。

私のソーシャルワーカー演習では、こうしたことを意識し

暮らしの場は今

第10回

僕の生活は今! みんなが心地よく生きられる優しい社会へ

ひとり暮らし26年

僕がひとり暮らしを始めてから、早いもので26年が経ちます。ちょうど宮城で全障研全国大会が開催された時でした。

ひとり暮らしを始めるきっかけはそれまで働いていた父の会社が倒産し、両親と一緒に宮城を離れなければいけなくなってしまったことからです。その時、いちばんつらく大変な両親の思いを考えるととても自分の気持ちを伝えることはできず、

これまでいろいろ活動をさせてもらったことに感謝し、両親とともに37年暮らしてきた思い出いっぱいの地を離れることになつてしましました。新たな地で両親との生活が始まりましたが、周りには両親だけで、話をする相手も両親だけ。特に私もすることもなく、ただ時間だけが過ぎていく日々が続きましたが、これからのことはゆつくり考えていけば、と自分に言い聞かせていました。

そんなある日、友人から部屋を空いているので戻つてこないかという話がありました。とても驚くとともにうれしくなり、そのことを両親や兄弟たちに伝えたところ、みんなひとり暮らしを応援してくれると言つてくれたので、僕の思いを理解していくくれていたんだなあってとてもありがたく思いました。

当時の僕はまだ二次障害を患う前で、少しばかり自分で歩くことや膝歩きもできていました。部屋の中では車椅子を使わずに身の回りのこと（入浴・調理以外）はほとんど自分でできる状態だったので、ひとり暮らしにはそんなに不安は感じませんでした。1カ所の事業所からヘル



全障研宮城支部

鷲見俊雄



発達保障をめざす 保育実践・療育実践交流集会

2月15日(日) 10:30~15:30

ZOOMミーティングによる「いまこそ、実践でつながろう」を合言葉に保育園や幼稚園、こども園などの通常の施設と、専門施設といわれる児童発達支援や放課後等デイサービスなどの場の違いをこえて、障害がある子どもや発達が気になる子どもへの実践、子育て支援の実践などを交流する学習会です。午前は地域に共通する子育てや保育・療育の課題、午後は実践報告を聞いて参加者みんなで討論します。

午前の部 10:30~12:00

講演 どこに生まれても子どもが輝く療育を 鹿児島のあゆみといま

山口雅子さん むぎのめ子ども発達支援センターリンく
ほか鹿児島県発達支援通園事業連絡協議会のみなさん

1980年代、鹿児島県内には障害のある乳幼児をもつ親は相談するところも通う場もなく孤独な子育てを強いられていきました。「どこに生まれても安心して子育てができる地域を」と声を上げ、手をつなぎあってきた親と実践者たちの運動によって、いま自治体に療育の場ができ実践が発展しています。乳児期からの悩みにこたえるにはさまざまな課題があり、母子保健や子育て支援とのつながりをつくることなど、簡単ではありません。「療育は権利」を合い言葉に実践と運動が続いている鹿児島のあゆみから学びあいたいと思います。

午後の部 13:00~15:30 ふたつの報告を聞いて参加者みんなで討論しましょう

実践報告1 保育園の実践

一人ひとり違うからこそおもしろい！
安心感と楽しさを土台に育ちあつた保育園での4年間

埼玉・所沢市公立保育園 菅野恵子さん

実践報告2 児童発達支援事業所での実践

気持ちが伝わることの心地よさ
並行通園で安心の世界を広げていった保育園児ゆうちゃん

京都・児童発達支援事業所パーチェ 橋本桃世さん

【参加方法】

定員300名

申し込みは 2月8日(日)まで

- 下記QRコードもしくはURLにアクセス、必要事項を記入してください。折り返し届く受付完了のメールで参加費の送金先をご案内します。
- 参加費2,000円(1人あたり)を指定の口座に送金してください。2月10日以降に参加のためのURLと資料を送ります。



<https://form.run/@jissen2026>

主催 NPO法人発達保障研究センター 協賛 全国障害者問題研究会

連絡先 〒162-0801 新宿区山吹町4-7 新宿山吹町ビル 全障研内

問い合わせ npocenter@nginet.or.jp

電話 080-4332-2601 (平日9時~17時)

おいひととき



お買い物体験



流しあわせ

お餅つき大会



山芋づくし

春はお子さまランチの会、夏はとろみかき氷にゼリー状の流しそうめん、駄菓子屋さんのお買い物体験、秋は芋ほり体験にハロウィンのかぼちゃスイーツ、冬は地元のそば打ち名人の年越しそば、毎年恒例のお正月の餅つき大会では餅ゼリーなど。摂食嚥下障害があるからこそ、大人になつても地域の人たちとつながつて、食を楽しみ続けていけたらいいなあと願っています。

子どもらしく過ごしてほしい。私たち、障害児者通所支援事業で毎日の給食とおやつ、季節毎行事食で、食形態を子どもたちに合わせて、さまざまな食体験活動を楽しんでいます。

春はお子さまランチの会、夏はとろみかき氷にゼリー状の流しそうめん、駄菓子屋さんのお買い物体験、秋は芋ほり体験にハロウィンのかぼちゃスイーツ、冬は地元のそば打ち名人の年越しそば、毎年恒例のお正月の餅つき大会では餅ゼリーなど。摂食嚥下障害があるからこそ、大人になつても地域の人たちとつながつて、食を楽しみ続けていけたらいいなあと願っています。

食を楽しもう
NPO法人ゆめのめ 大高美和
どんなに重い障害があつても、子どもらしく過ごしてほしい。

